

美味しくて食べやすいブドウの狩り園経営 ～祖父の代からのブドウ狩り園を次世代にも～

岡崎市 マルタ園（中根伸宏さん）
果樹（ブドウ）

【平成 29 年 7 月 21 日掲載】

岡崎市の中山間地域にある駒立地区において、ブドウ狩り園を営むマルタ園の中根伸宏さんをご紹介します。

植物を育てることの面白さに魅了され就農

マルタ園は、中根さんの祖父の代から続くブドウ狩り園です。昭和 35 年に駒立地区の同業者とともに「駒立ぶどう狩り組合」を設立し、地区をあげてブドウの栽培や集客に取り組んできました。

中根さんは、マルタ園の長男として昭和 46 年に生まれました。大学は植物に関わる学科に進みましたが、自分の家や地域の農家が経営に苦労する姿を見てきたため、当時は農家を継ぐつもりはありませんでした。しかし、大学で学んだ植物の生理や生育は非常に興味深く、植物を育てることを改めて面白いと感じ、平成 6 年に卒業と同時に就農しました。

当時マルタ園のブドウ狩り園の面積は、2 ha と地域でも規模の大きいものであり、家族経営では手が回らないぐらいでした。中根さんは、日々管理に明け暮れながらも、ブドウ生産者の勉強会に積極的に参加して知見を広めました。



中根伸宏さん

ブドウ栽培の難しさを痛感

中根さんが栽培管理などを中心に行うようになった平成 17 年に、主力品種の「巨峰」においてべと病が大発生しました。梅雨時に農薬散布ができない期間が 1 週間ほど続いたことが影響し、70a の畑全体に蔓延しました。実が色づく時期に葉が落ちて着色不良となり、商品価値が著しく低下したため、ほとんどの房を地面に掘った穴に捨てました。それに加え、葉が落ちたことで、翌年まで養分を幹に蓄えることができず、次の年になってから不作を招いたり幹ごと枯れるなど、大きな打撃を受けました。

また、別の年には、開花時期（6月上旬）に冷たい雨の日が続き、上手く受粉できず実がならない「花ぶるい」が、同じ畑の約 8 割で発生しました。樹勢のコントロールができていれば「花ぶるい」は抑えられたのではないかと、という思いから、ブドウ栽培における剪定や肥培管理の難しさを痛感しました。

樹の個性に合わせた管理へ

失敗を経験した中根さんは、現在、どんなに忙しくても 1 日 1 回はほ場全体を回り、病害虫の

発生状況の確認はもちろん、1本1本の樹の生育状況を観察するようにしています。樹勢が強すぎる樹は、抑えるように管理したり、日陰になって弱っている樹には、日光が十分当たるよう整えるなど、樹の状態に合わせた管理を行っています。中根さんは、ブドウ狩り園の経営をプロ野球に例えて、「自分やパートさんが監督やコーチで、新人選手や20年選手などのいろいろな樹の状態を見極めて上手く実をつける。お客さんに樹の晴れ姿を見てもらいながら実を味わってもらうのがブドウ狩り園だと思う。」と話してくれました。

種なしブドウ、食べやすいが「悩みの種」

マルタ園では、現在、消費者の望む種なしブドウの栽培と労力の省力化の実現が重要な課題となっています。消費者が種なしブドウを好むため、無核化できる品種の栽培面積を増やしていますが、一方で種なしブドウを作るためには、ジベレリン処理や摘粒に非常に手間がかかります。雇用労賃は年々増大しており、経費の2割以上となってきています。さらに、摘粒には技術が必要であり、経験の有無が作業効率に大きく影響するため、経験豊富な雇用の確保に毎年苦労しています。



収穫期の有核「巨峰」

また、現在の主力品種である「巨峰」について、無核「巨峰」はジベレリン処理の影響で熟期が早く、9月10日以降は食味が落ち、一方で有核「巨峰」は10月10日ごろまで販売できますが、種があるため来園者に人気がないなど課題がありました。

そこで、「巨峰」にかわる「黒系ブドウ」で、無核化と省力化を両立できる主力品種を探して、情報収集に努め、昨年から新品种の試作を始めました。「この品種が消費者に受け入れられれば、雇用の問題も解決できる」と、新品种に大きな期待を寄せています。

この先もこの地区でブドウ狩り園を続けたい

「駒立ぶどう狩り組合」では、現在、マルタ園を含め7戸が組合に所属し、上述のような新品种の導入検討など栽培に関する取組のほか、様々な集客活動を協力して行っています。これまでの組合の努力により、個々の経営は安定しており、後継者も多く就農しています。



中山間地に広がるブドウ園

中根さんは昨年度から組合長を務め、来園者にリピーターとなってもらうため、ブドウ狩りとバーベキューをセットで体験できるよう園地を整備したり、ピザ作り体験ができるような取組を始めたりと、様々な工夫をしています。「組合は今年で57年目となる。60年、70年、80年と、この地区でブドウ狩り園経営を続けていきたい。そのためにも、現在の課題である省力化を実現し、末永くやっていける体制を整えたい。もちろん美味しく食べやすいブドウを安定して作ることが一番大切だけどね。」と、1本1本の樹を大切にしながら地域とともに発展していく夢を語ってくれました。

執筆：農業経営課

取材協力：西三河農林水産事務所農業改良普及課